

公開講座ダイジェスト2025

跡見学園女子大学公開講座の記録



刊行にあたって

令和7年度の公開講座は特別企画で実施しました。本学は学術研究のために収集した、室町時代からの写本、卷子本、錦絵、かるた、双六など約3000点の「百人一首コレクション」を所蔵しています。今年、学園創立150周年を迎えたことに因み、貴重なコレクションの一部を特別公開する『百人一首展』を開催すると同時に、公開講座も百人一首をテーマに開催することにしました。

百人一首は日本人になじみの深いものです。13世紀前半に成立したとされる文化遺産が現代でもかるたとして親しまれ、日本人の生活に溶け込んでいるのは誇るべきことといえるでしょう。とはいえ、わたしたちは百人一首について、実のところどれだけ知っているのでしょうか。断片的な知識に留まっているのではないのでしょうか。

今回の公開講座では「知られざる百人一首の世界」と題し、歌、歌人、文学史、美術など多角的な視点から、その奥深さ、知られざる魅力の数々について、5人の講師のみなさんに解き明かしていただきました。受講者のアンケートを見ると、多くの方々が百人一首の発する時代を超えた文化の輝きに触れ、感銘を受けられたことが分かります。歴史的な文化遺産との新たな接点を発見された方も多かったのではないかと想像しています。百人一首の尽きせぬ魅力を伝えていただいた講師のみなさんに感謝申し上げます。

令和8年3月

跡見学園女子大学
学長 小 仲 信 孝

CONTENTS

刊行にあたって	跡見学園女子大学 学長 小仲 信孝	1
跡見学園創立 150 周年記念 百人一首公開講座 「知られざる百人一首の世界」総括	本学文学部人文学科 准教授 加美 甲多	3
春期教養コース（文京キャンパス） 『小倉百人一首』の歌の世界		4
1. 百人一首とのキャッチボール	本学兼任講師 佐佐木 頼綱	
2. 百人一首の文学史	本学名誉教授 神野藤 昭夫	
3. 『小倉百人一首』に選ばれた女性歌人とその歌	本学兼任講師 石井 正己	
秋期教養コース（新座キャンパス） 「文化遺産としての百人一首」		6
1. 跡見の百人一首コレクションとその魅力	本学名誉教授 神野藤 昭夫	
2. 教養を前提とする美術について考える－百人一首を中心に－	本学文学部人文学科 教授 矢島 新	
3. 和歌史のエポックメイキングとしての『小倉百人一首』歌	本学兼任講師 岩田 久美加	
受講生からのレポート		8
資料		

跡見学園創立 150 周年記念 百人一首公開講座
「知られざる百人一首の世界」総括
〈講座責任講師〉 本学文学部人文学科 准教授 加美 甲多

百人一首は誰しもがどこかで一度は触れたことがあるような、とりわけ有名な作品である。そして、『小倉百人一首』や競技かるたをテーマにした漫画、アニメ、ドラマが流行する等、令和の現在においても人々の関心は高い。一方で、『小倉百人一首』はその名前が先行してしまい、意外と知られていないことや研究の場においても解明されていない謎も多い。鎌倉時代のオリジナルである『小倉百人一首』からその後に創出された百人一首関連作品まで含めると、その対象は無限に近い広がりを見せる。それらを収集した本学の「百人一首コレクション」も約3000点に及び、百人一首の可能性の大きさを示している。そういったことを踏まえ、大変ありがたいことに本学創立150周年記念の一環として「知られざる百人一首の世界」というメインテーマで公開講座を開催できることとなった。

今回の百人一首公開講座では、春学期全3回は『小倉百人一首』の歌の世界」と題して、秋学期全3回は「文化遺産としての百人一首」と題して、多様な視点からそれぞれの講師の方にお話しただいた。具体的には次のような日時、内容で、時間はいずれも10時から11時30分で実施した。

【春学期】 於文京キャンパス

第1回：6月14日（土）

佐佐木頼綱（歌人・竹柏会歌誌「心の花」選歌委員・本学兼任講師）「百人一首とのキャッチボール」

第2回：6月21日（土）

神野藤昭夫（本学名誉教授）「百人一首の文学史」

第3回：6月28日（土）

石井正己（本学兼任講師・東京学芸大学名誉教授）『小倉百人一首』に選ばれた女性歌人とその歌」

【秋学期】 於新座キャンパス

第1回：10月4日（土）

神野藤昭夫（本学名誉教授）「跡見の百人一首コレクションとその魅力」

第2回：10月11日（土）

矢島新（本学教授）「教養を前提とする美術について考える ―百人一首を中心に―」

第3回：10月18日（土）

岩田久美加（本学兼任講師）「和歌史のエポックメイキングとしての『小倉百人一首』歌」

公開講座と同時に、本学の「百人一首コレクション」のなかから貴重資料20数点の展示「百人一首展」（春秋で展示内容変更）も実施した。春秋あわせて全6回の講座や展示には予想を超える数の受講者、見学者の方にお越しいただき、肯定的な意見や感想も数多く寄せられた。百人一首の魅力や作品世界の広がりを感じていただける良い機会になったと考える。

公開講座春期教養コース（文京キャンパス）
『小倉百人一首』の歌の世界
2025年6月14日～6月28日（毎週土曜日）〈全3回〉
〈講座責任講師〉 本学文学部人文学科 准教授 加美 甲多

〈第1回 6月14日〉

百人一首とのキャッチボール

本学兼任講師

佐佐木 頼綱

公開講座の初回として行った私の講座では、「百人一首を誇りにする」をテーマに、跡見学園と百人一首のつながりについて紹介しました。

・これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関 蟬丸（10 番）

跡見女子大学創立に深く関わった伊藤嘉夫は、先の大戦中、歌人・佐佐木信綱と共に、視力を失った傷痍軍人たちに短歌の指導を行いました。二人は蟬丸や塙保己一の歌を引きながら、視覚に障がいのある人の表現が、千年にわたる和歌の歴史の中で評価され、愛誦されてきたことを伝えていきます。短歌を通して誇りを手渡そうとしたこの実践を、信綱と伊藤は人生における重要な仕事であるとしています。その志を受け継ごうと、現在私も視覚障がい者団体や精神科医療機関、少年院などで短歌授業を行っています。孤独や望郷、希死念慮といった現代の痛みに、千年前の歌が思いがけず寄り添った瞬間を紹介しました。

講座後半では、和歌や近現代短歌に触れた跡見の学生たちが、受け取った言葉をどのように現代の表現へと昇華していったのかを取り上げました。

・黒髪の乱れも知らずうち伏せばまず搔きやりし人ぞ恋しき 和泉式部『後拾遺集』

・だくだくとボカリ飲みほす黒髪の君のくちびるはまだ潤わない 西谷紡（跡見学生）

・やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君 与謝野晶子『みだれ髪』

・大好きな人に撮ってもらう自分全部ぶれてて脈拍みたい 井上凜（跡見学生）

・佐保山にたなびく霞見る毎に妹を思ひて泣かぬ日はなし 大伴家持『万葉集』

・終鈴にまたねと言ったそのくせに奇数の机あまったプリン 飯田桃香（跡見学生）

相聞歌や挽歌を「美しい古典」として鑑賞するだけでなく、自分自身を捉え直すための言葉として向き合う—そんな可能性を、学生たちと共に探りました。

百人一首は、人生のある局面でふと立ち上がり、言葉にならずにいる思いや経験を静かに照らし返してくれる存在です。その時間を受講者の皆さんと分かち合えたことは、私にとっても忘れがたいひとときとなりました。

〈第2回 6月21日〉

百人一首の文学史

本学名誉教授

神野藤 昭夫

百人一首の歌は、どのような現場から生まれ、どのようなアンソロジー（詞華集）として成立したか。それがどのように受け継がれることによって、長く生き続けたか。それをたどることによって、百人一首の文学史をえがきだすことができる。

さらに百人一首とその歌のちからは、さまざまな分野と交流して、文化力として豊かな文化を生み出して来たといえる。

春学期には、このような問題意識の主に関前半に焦点をあてて、紀貫之と道綱母の歌を取りあげて講じた。

貫之の「ひとはいさ」の歌は、機知に満ちた贈答の現場から生まれた歌であること、それが、変わらぬ自然に対して、変わりやすい人の世の無常を嘆く余情に満ちた歌へと変容してゆく推移を明らかにした。

また道綱母の「なげきつつ」の歌では、従来『蜻蛉日記』にみえる事情が歌の現場と考えられてきたが、そうではなく、夫兼家との贈答歌として生まれたものであり、それが道綱母の女の嘆きを強調する歌へと書き改められ、女の不幸を歌い上げた絶唱とみられるにいたったとみる私見を述べた。

〈第3回 6月28日〉

『小倉百人一首』に選ばれた女性歌人とその歌

本学兼任講師

石井 正己

『小倉百人一首』には女性歌人が21人含まれる。この比率は意外に高いと思われる。56番の和泉式部から、紫式部、大弐三位、赤染衛門、小式部内侍、伊勢大輔、62番の清少納言のあたりに集中している。それは11世紀初めの一条天皇の時代で、なかでも藤原道長の娘・彰子に仕えた女房が多い。彼女たちは受領の家で教育され、『枕草子』や『源氏物語』を書いただけでなく、その基礎には優れた和歌の教養があったのである。

21首の内訳を見ると、四季の歌が3首、恋の歌が14首、どこにも分類しがたい雑の歌が4首になる。古典和歌は四季の歌と恋の歌を柱とするが、恋の歌が66%という比重は極めて高い。『小倉百人一首』には恋の歌が43首なので、14首は32%にあたるが、四季の歌は32首なので、3首というのは9%に過ぎない。撰者の藤原定家が女性の詠んだ恋の歌を高く評価したことは間違いない。

公開講座では、4人の歌を取り上げた。藤原道綱母の「嘆きつつ」の歌は、夫の藤原兼家を通わせる結婚生活の中で詠んだ閨怨詩だった。紫式部の「めぐり逢ひて」の歌は、幼友達である受領の娘とのはかない再会を詠んでいる。清少納言の「夜をこめて」

の歌は、中国の故事や日本の歌枕を踏まえて藤原行成と交わした当意即妙の歌だった。式子内親王の「玉の緒よ」の歌は、題詠という環境のもとで男の立場で詠んだ歌と考えられる。

跡見学園女子大学には、「百人一首」というユニークな授業がある。この大学が百人一首の一大コレクションを所有するに至った背景には、創業者・跡見花蹊の百人一首に対する深い造詣がある。コレクションをさらに親しみやすく公開して、「跡見と言えば百人一首！百人一首と言えば跡見！」ということが広く知られるようになることが期待される。今回の公開講座はそのための初めの一歩になったと思われる。

公開講座秋期教養コース（新座キャンパス）
「文化遺産としての百人一首」
2025年10月4日～10月18日（毎週土曜日）〈全3回〉
〈講座責任講師〉本学文学部人文学科 准教授 加美 甲多

〈第1回 10月4日〉

跡見の百人一首コレクションとその魅力

本学名誉教授

神野藤 昭夫

秋学期は、春学期に掲げた問題意識の後半に焦点をあて、はじめに在原業平と素性法師の歌をとりあげ、ついで百人一首の歌が江戸に入って、絵や滑稽、あるいはかるたなどと結びついてゆく様相を、主に跡見の百人一首コレクションの映像によって、その特色と魅力を紹介した。

業平の「ちはやふる」では、江戸では、定家の「ちはやふる」「水くぐるとは」と読む訓みと解釈が有力であり、『百人一首和歌初衣抄』などにみられる意図的に滑稽な解釈をしてみせる先蹤が、落語の「ちはやふる」を生み出していることや、本歌がマンガやドラマを生み出していることを述べた。

また「いまこむと」の歌では、定家の「月來說」が契沖の「一夜説」へと解釈が転じてゆくこと、さらにこの歌が竹久夢二の歌曲「宵待草」に響いている可能性について、その詩と画業をたどって論じた。

さらに、絵と滑稽と結びついて楽しまれた江戸の異種百人一首とよばれる作品群を、跡見学園女子大学図書館のホームページから検索すれば、その映像をみることができるものを中心に紹介したところである。

〈第2回 10月11日〉

教養を前提とする美術について考える
―百人一首を中心に―

本学文学部人文学科教授

矢島 新

全6回のうち5回が文学系の講話であった中で、美術の観点で百人一首に関わる話をせよとの難しいミッションを頂戴した。乏しい知見の中から百人一首に関わる事項を拾い出し、文学的教養に基づく絵画表現というテーマを設定して、以下の3章に分けて講じた。

1. 百人一首関連の絵画について

まず実際の作品を確認する意味で、跡見コレクションを中心に百人一首関連の絵画を紹介した。取り上げたのは以下の12点

牡丹花肖柏書『百人一首写本』（室町1）

『百人一首刊（版）本』（江戸10）

『絵本小倉錦』奥村政信画（江戸224～233）

勝川春章画『錦百人一首あづま織』（江戸22）

冷泉為恭画《かるた百人一首》（江戸後期）

《百人一首図変わりかるた》（江戸197）

葛飾北斎画《姥がえとき》（江戸26）

《小倉擬百人一首》（江戸29）

北尾政演画『吾妻曲狂歌文庫』（江戸2）

北尾政演画『古今狂歌袋』（江戸1）

『俳諧百人一首』（江戸160）

《小倉山百人一首》（江戸58）

（ ）内は図書館アーカイブの番号

以上を通覧することで、室町期に写本が作られ、江戸時代になると版本が出版されて広く流通し、江戸中期に一流絵師による豪華な出版があり、江戸後期にパロディ的な錦絵や、狂歌や俳句でのアンソロジーが出版されるようになった流れを確認した。

2. 教養を前提とする表現

島国日本では大陸の文明圏に比べて比較的穏やか

な文化環境が続いたので、貴族から町人に至る幅広い階層が古典文学などの教養を共有し、それに基づいた高度な美術が発達した。その様相を、2－1 文字と絵（和歌をはじめとする文字と絵の歴史）、2－2 古典文学を踏まえた美術（源氏物語や伊勢物語などに取材する絵画）、2－3 歌仙絵（歌仙の絵と古歌に取材する絵画）の順に分析した。

3. 見立て&やつし

最後に鈴木春信の錦絵を中心に見立絵について分析し、全体のまとめとした。扱った内容は直接百人一首に関わらぬものも含んだが、結論として、浮世絵版画は庶民が気軽に買えたアートであったこと、そこに教養を前提にした表現が盛り込まれたこと、とりわけ古歌についての教養には見るべきものがあったこと、それを支えたのが江戸中期以降の百人一首の普及であったこと、の4点を提示した。

〈第3回 10月18日〉

和歌史のエポックメイキングとしての

『小倉百人一首』歌

本学兼任講師

岩田 久美加

『小倉百人一首』の撰者については、近年、田淵句美子による、厳密には定家撰とはいえないとする説が新たな定説となりつつある状況である。しかし、『明月記』の文暦二年（一二三五年）五月二十七日条は、定家撰『百人秀歌』の成立事情を述べる記事であることは確かである。『百人秀歌』と『小倉百人一首』は九十七首が重複しており、今回扱う山辺赤人と陽成院のうたは、その重複している九十七首のうちに該当する。従って、『百人秀歌』が後に第三者の手によって編纂し直され『小倉百人一首』となったとしても、それらのうたを定家が撰んでいることには変わりがない。従って、本講座においては、『百人一首』の成立論に立ち入ることはせず、定家が秀歌として赤人歌と陽成院歌を撰んでいることに焦点を絞って論じた。

まず、うたにおける富士山は、上代では、降雪や積雪とともに詠まれ、中古では、噴火の影響から「火」と「思ひ」の「ひ」をかける恋歌に詠まれていた。それを定家は、『百人一首』の赤人歌において、神話性を有し君主の統治の正統性の保障がある、積雪する富士に降雪するという「雪の重層性」の景として捉え直していることを確認した。

次に、陽成院歌は、上の句の表現を先行表現を参考に新たに創出し、「みなのかみ」という地名も彼が発明した可能性を指摘した上で、上の句で提示した景によって、恋が積もって淵になるように「恋心が深くなる」という心情を表し、川が下流に行くほど太くなるのと同様に恋心も時間の経過によって成長するという普遍的な現象を表現していることを確認した。

その上で、『百人秀歌』が蓮生からの依頼であり、彼の子女への初心者向きの秀歌撰であることを配慮して、東国の歌枕である赤人歌「富士」と陽成院歌「筑波嶺」を撰び、それらは従来の「富士」や「筑波嶺」のうたとは異なる詠み方をしており、和歌の新たな面白さを提示した可能性を示唆した。

受講生からのレポート

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生

川田 政道さん

ことばの灯 佐佐木頼綱先生と出会った日

—— 佐佐木頼綱先生が四代にわたり跡見学園とご縁を重ねてこられたこと ——

跡見学園創立 150 周年記念の公開講座、知られざる百人一首の世界の第 1 回に参加した。講師は、現代短歌の旗手・佐佐木頼綱先生。穏やかな語り口で、ことばの灯をそっと私たちの胸にともしてくれのような時間だった。

人の心は時代を超えて、いまに生きている。愛おしさ、哀しさ、祈り——千年の時を隔てて交わされる想いの伝播。百人一首はもはや古典ではなく、現代を生きる私にも血が通うものとして届いている。そして、ことばは未来にも血を通わせる営みでもある。先人への感謝と敬意を自分の中に取り込み、まだ見ぬ次世代へと紡ぐ。まるでタイムマシンのようだ。

印象的だったのは、京都のお茶屋の話。昔ながらの味にこだわった店は、時代に取り残されて閉じたという。変わらないことに価値があるのではない。変わることを恐れず、核を守り抜く。それが伝統という生きものの本質なのだと気づかされた。

佐佐木先生は、視覚障がい者や少年院、精神科病院など、ことばが届きにくい場所にも歌を届けてきた。その姿勢にも胸を打たれた。ことばは知識ではなく、人を包む灯となる。

跡見の学生たちの短歌も紹介され、どれもまっすぐで、自分だけのことばにあふれていた。私も一句詠んでみた。

こだまする
ときの彼方に

はずむ夢

のべつまくなし

ひとすじの灯よ

遠くても、ことばは生きている。今夜、私はその灯を胸に抱きしめている。佐佐木先生に、深く感謝している。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生

京 修一さん

和歌とは五感の極み

秋の京都。

ベストタイミングは 11 月の中頃あたり。

ちょうどこの頃、紅葉が古都を埋め尽くす。

京都の紅葉なら嵯峨野の常寂光寺がおそらくナンバーワンだろう。

理由は 3 つある。

1 つ目は、もちろん紅葉のベストロケーションであること。

2 つ目は、藤原定家の別荘跡地だったこと。

3 つ目は常寂光寺という荘厳なる名前にひかれたこと。

小倉山中腹にある嵯峨野は、平安時代からいわゆる世捨て人の別荘地。

晩年藤原定家もここに引きこもり、新古今和歌集の選定にあたった。

それが小倉百人一首という名前の由来。

来ぬ人を 松帆の浦の夕風に 焼くや藻塩の身も焦がれつつ

（約束したのに来ないあの人を待っていると、松帆の浦の夕風時に焼くあの藻塩のように、我が身も焼かれしきりに恋い焦がれてしまう）

この寺は別名時雨亭ともいう。

まさしく今日はこんな景観なのだ。
茅葺きの仁王門をくぐり急な石段を上ると、ほの
かな紅葉のトンネルが待ち受けていた。
定家の一首が蘇る。

吹き払う 紅葉の上の霧はれて 嶺確かなる
嵐山かな

嵯峨野は歌人あこがれの聖地であった。
室町時代、日蓮宗の住職で歌人でもあった日禎と
いう僧もこの地に隠居し寺を建立、景観の美しさに
常寂光寺と名付けた。

この名前は仏教の常寂光土から由来とのこと。
仏教的にいうと現世と来世がある。
死んだら来世にいくわけだ。
その来世は浄土と呼ばれ2ヶ所ある。
東方にある極楽浄土と西方にある浄瑠璃浄土。
だから全国に極楽寺とか浄瑠璃寺と言う名の寺が
たくさんある。
その浄土はさらに四段の層に分かれている。
一番下の層に死んだ人たちが集まる凡聖同居土、
その上に悟りを開いた菩薩たちがいる層が2つあり、
最上段に仏だけがいる層がある。
仏だけがいる層が常寂光土。
いくら修業しても仏の域までは辿り着くことなど
できない修業僧たちは、イメージの中でその空間を
思い描いた。

そこには静かに、穏やかに、淡く柔らかな光が射し
込んでいる。

季節で言えばまさに秋、紅葉の合間から木漏れて
くる寂しい日差しなのだ。

境内をゆっくり味わうように探索した。
まさにその通りだと思った。
長い年月は流れているのだが、同じ感動を堪能す
ることができた。

ぬかるんだ階段を上り詰め、五感を研ぎ澄ませて
本尊十界大曼荼羅の前に立つと、今日は独りでよか
ったのだと感じた。

面前に広がるこの情景は、決して連れ立って散策
する観光スポットなどではないと達観したからだ。

なぜなら、ここは現世にいて唯一体感できる浄土
への天国への階段なのだから。

(五年程前の晩秋 京都にて 京 修一)

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生
山口 久美子さん

『百人一首とのキャッチボール』に参加して

百人一首は飛鳥時代から鎌倉時代までの歌が選ば
れていることから、古代からの日本人の歌に関する
感性を長い年月をかけて我々に伝え続ける興味深い
文化と認識してきた。そこから、現代の我々に与える
影響に興味を持ち、佐佐木頼綱先生のご講演を拝聴
した。

このご講演で感じたことは、百人一首の時代、即ち
歌が作られたそれぞれの時代の言語的・文化的背景
を知ることにより、各歌が現代人の感性をさらに刺
激するということである。時空を超越した共感。障が
いや精神疾患や様々な事状をかかえていたり、国籍
の異なる子どもたちにも受け止められ、さらに歌を
作るという行為に至る。『すごい力』だ。

表現する言葉や表現の方法が変化しても、また、テ
ーマが時代とともに変化しても短歌という形式の表
現が使われている。その理由は何か。個人的に次のよ
うに考えた。

まず、短歌という形式。三十一音で表現するととも
小さな世界。しかし、そこにあるのは日本語のリズ
ム・言葉の美しさ、そして小さな「窓」から見えてく
る深い世界。

そして、古代から続く日本語。初めは文字がなく、
音として記憶され、伝えられていたと思う。言語は少
しずつ変化していくが、大きな流れとしての日本語
は変わらない。

さらに、漢字と仮名を組み合わせる表記方法。誠に
すごい。春を表わすにも「春」「はる」「ハル」。これ
らに万葉仮名や変体仮名を加えると、作者の心が手
に取るように我々に伝わってくる。

国文学も文学史も勉強したことがないが、このご

講演を拝聴して、勉強してみたいと改めて思った。日本で最初の歌の本『万葉集』が成立するまでの歌の変遷、当時の人々にとっての歌とは何であったのか…等々。

佐佐木頼綱先生と、この機会を作ってくださった跡見学園に心から感謝します。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生

川田 政道さん

百人一首を文学史として読む ―「つくばねの」と再解釈の愉しみ―神野藤先生 講義レポート

神野藤先生の講義では、百人一首を名歌の寄せ集めではなく、和歌の歴史と伝承を編み上げた文学史として読む視点が提示された。先生からは以下の二首を通じて、詠まれた場と編集による意味の変化が鮮やかに示された。

「ひとはいさ」は古今集では恋の余情を帯びるが、貫之集では旅先の宿での問いかけとして詠まれた一首で返歌もあり、本来は宿主との応酬にあった歌が、百人一首では抽象的な情趣をまとめて再構成されている。

「なげきつつ」は蜻蛉日記の中で道綱母が兼家を待ちながら戸を開けずに詠んだ切実な歌だが、拾遺集や大鏡では兼家の語りに変わり、戸を開けた女として再解釈されている。歌の意味は、語られる場所によってすら転倒しうるのだと先生は語られた。

私は講義を受け、百人一首から陽成院の「つくばねの」を選んでみた。筑波山から流れ落ちる水が川となり、やがて深い淵になるように、恋が募って沈んでいく心情を詠んだこの歌は、万葉集の類歌に酷似し再詠とされてきた。それでも定家があえてこの一首を選んだ背景に注目したい。陽成院は17歳で天皇を退位させられ、政治から退いたのちも和歌で自己を語

ろうとした。古歌の形に心情を重ねたのだろう。また、「つくばね」は本来筑波山の嶺だが、後代には羽根突きの衝羽根と重ねて読む象徴的解釈も生まれている。百人一首とは、過去と今が会い直す場所であり、そのことをこの一首に私は見出した。先生の講義を通じ、百人一首が後の解釈も受け止めながら読み継がれていくものであると知り、大変得難い機会となった。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生

宇野 美由紀さん

百人一首 想いは千年を越えて

跡見学園創立 150 周年記念公開講座「知られざる百人一首の世界」（神野藤昭夫先生）を受講した。学生時代に先生の講義を受けた経験があるからこそ、今回あらためて先生のお話を伺い、学生時代とはまた違った視点で、作品の魅力や文学の奥深さがいっそう心に響いた。

印象に残ったのは、道綱母の「なげきつつ」の歌の解説である。この歌は、「訪ねてこない人に対する嘆きや悲しみを綴った歌」と一言で表現されがちだが、その根底には相手への思慕の情がある。その相手が今夜は他の女性の元へ通っていると知っているからこそ、夜がより長く感じられたのだろう。そこには嫉妬や虚しさといった通い婚特有の複雑な感情が重なっていると感じる。

紀貫之の「ひとはいさ」の作品を含め、先生の講義では大鏡と蜻蛉日記の事実関係の相違点に触れた内容が紹介された。和歌集や日記文学には、事実を正確に伝えること以上に「伝えたい想いをどう伝えるか」が主題として描かれていると気付かされた。蜻蛉日記は、通い婚制度の中で「待つ」立場にあった女性が、不安や葛藤を記し、感情の真実を残した文学作品である。事実と異なる点があっても、切なさや寂しい想いを綴ることが、彼女にとって大切だったのだろう。

さらに、蜻蛉日記が源氏物語を創作する元になったという先生のご考察にも深く共感した。千年が経った今でも、心変わりした人への寂しさや、人を恋しく思う気持ちは変わらないからこそ、和歌や物語が共感を呼び、今なお読み継がれているのだと実感した。

卒業してから再度、先生の講義を対面で受講でき、懐かしさとともに、言葉に込められた人の想いが、時を越えて私たちに語りかけてくることを改めて感じた。このような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界 春期教養コース（文京）受講生 川田 政道さん

声を紡ぐ時のなかで

百人一首は跡見花蹊先生の教育に深く根ざし、言葉と教養をつなぐ伝統として今も息づいている。創立150周年記念講座の第3回、跡見学園兼任講師・東京学芸大学名誉教授の石井正己先生は、女性歌人の声が時代を超えて響く姿を鮮やかに描き出した。

『大鏡』に和歌の名手として登場する道綱母は、夫の兼家がその才能を決して手離さなかった。彼女の歌は沈黙を超えた強い声として歴史に刻まれている。

紫式部は、地方官の娘として都と地方を行き来した経験が『源氏物語』の多層的な人物像を生んだ。一期一会の視点で、一瞬ごとの出会いが文学の深みを増したと理解した。

清少納言は、藤原行成との軽妙な応酬を通じ、感性和知性を自在に遊ばせ自我を確立。その姿勢が女性の声を際立たせた。三代にわたり百人一首に名を残す歌人でもある。

式子内親王の「忍ぶ恋」は、本来男性が詠む題材を女性の立場で表現し、現代的に見ればジェンダーの越境といえる。定型の中で己の内面に深く降りていった歌人だ。

百人一首の女性歌人21首のうち14首が恋の歌で、機微を鋭く詠み続けた証しである。平安の和歌は生活の実感から芸術へと変貌し、女性の声は沈黙や抑制を越えて多様に響いた。

千年を超える声の系譜を思いながら、講座に触発され男性の私もジェンダー視点から一句詠んでみた。

あふるこへ
ときのせしまに
みみすませ
かたりつがるる
けひのひかり

講義の最後、石井先生は「百人一首といえど跡見」と述べられ、私たちも喜びをあらわにした。21人の女性歌人を撰んだ藤原定家のまなざしは、声の力における女性参画の可能性を、千年前からそっと示していたのかもしれない。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界 春期教養コース（文京）受講生 芦界 芳江さん

千年の誇りを心に宿すために

純粹に百人一首の真髄を学び直したいとの思いから、この講座の受講に至りました。

私は、大学でリスキリングをした後、先の大戦に参戦しながらも私達の母国語がなくならずに今も読み書き話すことができることのありがたさを身に染みて感じ、それ以来毎年詠進歌に応募をしています。硯

で墨を磨り、筆を使って半紙に揮毫するという時間を大切に考え、毎年題詠に励んでおります。

1. 各講座を受けた感想

諸先生方からは、①百人一首は、様々な人の心を癒し慰め、千年前の歌人と心が繋がることで、自分の心の現在位置を教えてくれ、心に花を咲かせてくれるもの。②anthologyとして成立した百人一首には、各歌人の価値観もあり、歌が場から切り離されている自由さも持っていて、文学史を通すことでその文化力を探求できる楽しみがあるもの。③当時に21人もの女性歌人が百人一首に選ばれているが、この時代に女性がこんなにも選ばれているということは他国にはなく、和歌を通して仏教の無常観も感じられ、自然や人生を知ることでもでき、生活の和歌から芸術にまでなった素晴らしいものであることを学び大変勉強になりました。

2. 講座をこれから活かす為の課題

勤めている花蹊記念資料館において、先日まで花蹊作である王朝美の作品、「明治天皇御製百首」を展示していましたが、今後花蹊先生がいかに関百人一首に惹かれたかに焦点を当てられたら、百人一首を通して、日本の美しい文字を覚え・歌の心を知り・素晴らしい日本の古典に触れて欲しいとの花蹊先生の願いが作品に込められていることを皆さんにお伝えできるのではないかと思います。

3. 百人一首の今後の展望

花蹊先生作の作品に「明治天皇御製百首」屏風仕立て等があるので、百人一首かるたと一緒に展示できたら、更に来館者に理解してもらいやすいのではないかと考えております。

この度の講座受講が更なる一助となるよう今後も「目と手と心」を持って常に来館者を気持ち良く迎えたいと思っております。

また、今後の詠進歌を作る際には、歌に深みができるような題詠を心掛けていきたいです。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生

川田 政道さん

ことばの灯が交わる刻 ― 百人一首と私たちの今ここ

跡見学園創立 150 周年記念講座において、三名の先生方が多彩な視点で、百人一首を今に息づく言葉として私たちに確かに手渡された。

佐佐木頼綱先生は、視覚障がい者や少年院など、ことばが届きにくい場にも短歌を届け続けた。ことばは単なる知識の蓄積ではなく、人を包み照らす灯であると穏やかに語り、四代にわたる跡見との深い縁に深く胸に刻まれた。紹介された学生たちの短歌は純真な眼差しに新たな息吹を感じさせた。

神野藤昭夫先生は、「ひとはいさ」「なげきつつ」などの歌が伝承や文脈により意味を変える過程を鮮烈に紐解いた。私は講義をきっかけに陽成院の「つくばねの」を読み返し、恋の深まりと衝羽根の象徴性が重なる解釈に新たな光を見いだした。こうした読み返しこそ、百人一首が時代と共に命を吹き込まれる証であると実感した。

石井正己先生は、道綱母、紫式部、清少納言、式子内親王らの和歌を通じて、女性たちが表現の場を切り拓いてきた軌跡を描いた。藤原定家が21人もの女性歌人を撰んだことには、当時としては先駆的な表現の多様性への理解が込められており、現代のジェンダー観とも響き合う意義深い選択であると確信する。

三回の講座を経て、ことばの奥行きと力に静かに触れた。千年を越えて語りかけてくる声に耳を澄ませ、その余韻のなかで、一首をそっと置いた。

あふるこへ

ときのせしまに

みみすませ

かたりつがるる
けひのひかりを

講義の締めくくりに石井先生が語られた「百人一首といえど跡見」ということばは、私たちの胸に深く響き、この記念講座に温かな灯を確かにともした。今回の学びを糧に、ことばの力をこれからも見つめていく。

春期教養コース『小倉百人一首』の歌の世界

春期教養コース（文京）受講生
瀧上 浩司さん

『小倉百人一首』の歌の世界

持統天皇(わが国最初の永続的な都である藤原京を作った。)の「春過ぎて夏きたるらし白妙の衣干したり天の香具山」や阿部仲麻呂(帰国の機会を失って唐朝につかえ、文名をあげた。)の「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」は万葉集と百人一首で時代が異なってもよく知られていますが、後鳥羽上皇(京都では討幕の計画が進められ、その中心となっていた。)や右大将道綱母(『蜻蛉日記』の作者)・紫式部(『源氏物語』の作者)・清少納言(『枕草子』の作者)が百人一首とどう関わっているか、関心を抱いての参加となりました。

第1回「百人一首とのキャッチボール」では紫式部の「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月かな」は希望と絶望に遭遇するやるせなさを覚え、後鳥羽上皇の「人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は」は純粋なものだけでなく、愛と恨みが同居しているそうですが、和歌の修辞法よりももう一步踏み込んで、相反する二つの要素を盛り込んでいました。

第2回「百人一首の文学史」では後鳥羽上皇と藤原定家の和歌観の違いを説明されていましたが、私は、後鳥羽上皇の「見渡せば山もとかすむ水無瀬川 タベは秋となに思ひけむ」(枕草子の言い方をまねてい

る)と藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」(源氏物語の「明石」を典拠としたとされている)(manapedia)の比較をホームページで見て、定家が主家の九條家に寄り添って鎌倉方について御子左家を存続させた劇を見ているような感動を覚えます。

第3回『小倉百人一首』に選ばれた女性歌人とその歌』では右大将道綱母の「歎きつつひとり寝る夜の明くる間は いかに久しきものとかは知る」の詳しい状況が『蜻蛉日記【うつろひたる菊/町の小路の女】～九月ばかりになりて <https://kobun.info/kagerou-utsurohitarukiku>』むべなう、十月つごもり方に、三夜しきりて見えぬ時あり。つれなうて、「しばし試みるほどに。」など、けしきあり。これより夕さりつ方、「内裏にのがるまじかりけり。」とて出づるに、心得で、のように書かれているそうですが、昔懐かしい古文の助詞の種類に繋がる歌で、新たな視点を得ました。

以上、日本史は政治史がメインで、古典は日記・物語・随筆がメインですが、和歌の読み取りから知識が身に付きました。

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生
川田 政道さん

ちはやぶる紅(くれなゐ)、いまこむと有明～神野藤昭夫先生 受講レポート～

神野藤昭夫先生の講座は、「百人一首といえど跡見」を実感する豊かな時間であった。跡見学園が150年の歴史で培った百人一首コレクションを画像とともに紹介し、版木や版本、絵画などを通して、和歌が人々の生活と結びつき、文化の森を形成してきたことが示された。

まず在原業平の「ちはやぶる 神代もきかず 龍田川 から紅に水くくるとは」が取り上げられた。絶世

の紅葉の華麗さを伝える句であるが、江戸落語『ちはやふる』では力士・龍田川をめぐる滑稽な物語として解釈され、和歌の世界が笑いの芸能に転じる例として示された。

続いて素性法師の「今来むと いひしばかりに 長月の 有明の月を待ちいでつるかな」が取り上げられ、「一夜説」と「月来（つきごろ）説」という二つの読みが紹介された。一夜説は恋人を待つ切ない一夜を、月来説は秋の夜長の月の満ち欠けを恋の時間の象徴として読む解釈である。契沖の文献実証主義も示され、古典解釈の多層性を実感した。

両句は「くれなゐ」「長月」といった季語が響き、秋期講座にふさわしい風情を添えていた。百人一首は江戸期に大衆文化として広まり、竹久夢二の『宵待草』にも情感が継承されたことが紹介された。さらに現今百人一首には跡見花隠先生の句が採られ、学園の精神と重なり息づくことが伝えられた。

講座後、私は「筑波嶺の峰より落つるみな川の川」（陽成院）の落語的珍解釈を調べ、力士・筑波嶺とみなの川の面白さを体感した。

終講後、教え子や卒業生が自然と先生のもとに集い、温かな光景が広がった。この光景は、跡見の百人一首が時を忘れ心を結ぶ縁であることを示していた。

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生 川田 政道さん

教養がつなぐ美と人の対話～矢島 新先生 受講レポート～

矢島新先生の講座「教養を前提とする美術について考える―百人一首を中心に―」では、日本の美術が単なる装飾ではなく、教養を通して心を交わす対話の文化であることを学びました。

京都・小倉山荘で定家の小倉色紙が、室町末期の茶

人・武野紹鴎の茶会に掛けられたことなどを契機に、百人一首は桃山時代に注目を集めます。江戸時代には庶民文化として広まり、角倉素庵に絵姿の原型を見ることができます。また、龍田川の札に八橋が描かれ、花札のあやめに通じるところもあると聞きました。

本阿弥光悦の《舟橋蒔絵硯箱》では、舟の絵の上に橋を架けて「舟橋」を示し、和歌と造形のコラボレーションを感じます。《忍蒔絵硯箱》は忍草の文様に「たれゆゑに」の文字をひそめ、百人一首の「陸奥のしのぶもぢずり」を踏まえた歌が、『伊勢物語』冒頭で引用されて在原業平の恋の情緒を伝えています。

江戸の浮世絵では、古典の人物や物語を現実の江戸の町娘や遊女に置き換える見立ての手法がありました。鈴木春信は小野小町を町娘として描くなど、身分や時代を意図的に崩すやつしの表現を用いています。古典と庶民の生活が重なり合うところに、鑑賞の楽しみが生まれるのだと感じました。

講座では、白隠の《柿本人麻呂文字絵》が、人丸の文字を人の姿に変え、「火止まる」として火災除けの信仰に用いられたことを学びました。講座後に自ら調べると、「人産まる」とも読めることから安産の神として信仰された例もあり、文字絵の奥行きや多層的な広がりを感じました。

教養とは知識を積むことだけではなく、他者の表現を受け止める姿勢そのものです。美術は静かに心を通わせる場であり、人をつなぐ力を秘めています。矢島先生の講座を通じ、門外漢の私も美術の巧みな遊びに触れる貴重な機会となりました。この学びを日常でも意識的に生かし、教養や感性を深めていきたいと考えます。

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生 川田 政道さん

富士に燃ゆる恋、筑波に宿る神 — 秀歌の軌跡

跡見学園創立 150 周年記念公開講座「知られざる百人一首の世界」（全 6 回）の最終回で、岩田久美加先生は、『小倉百人一首』の成立と百人秀歌の意義を明快に解説された。

講座では、東国の歌枕として、4 番「田子の浦に」（富士）と 13 番「つくばねの」（みなの川）の二首が採り上げられた。

「田子の浦に」は、万葉集反歌の「田子の浦ゆ ましろにそ降りける」が、「に」「白妙」「降りつつ」に改められ、コウゾ布（白妙）のような積雪に降り注ぐ雪として洗練された表現を実感した。

「つくばねの」を詠んだ陽成院は、若くして退位後も六十年にわたり歌を詠み、この句で恋心の成長（つもりて）と普遍性（ふちとなり）を宿している。筑波嶺は上代の歌垣の地で、東国の恋心の舞台として示された。春秋講座の集大成として、この歌に出会えたことに“つくづく”感銘を受けた。

先生はまた、蓮生の子女への秀歌撰の意味合いから、明月記に記された百人秀歌をベースに百人一首が撰集されたとの考察を示された。

講座を受け、わたしは 51 番「かくとだに えはやいぶきの さしも草」を自主学习すると、伊吹山は畿内（近江伊吹）と下野（下野伊吹）があり、いずれもヨモギ（さしも草）の産地であることを知った。定家は歌枕に都と東国の伊吹を並べ、恋の普遍性と距離感を響かせる構造を意図した可能性もある。自然と人の営みが結びつくことを実感し、古歌の世界への関心が一層深まった。

今回の講座を通じ、一首一首の歴史的な文脈や作者の意図、後世の編集者の工夫を学んだ。上句と下句に映る景物と心情、富士の噴煙のように燃ゆる恋、筑波

の神による君の庇護——逆転的な詩的空間を思い描き、百人一首の奥深さを心に刻む時間となった。

それは過去と現在、そして未来をつなぐ詩の力をあらためて感じさせる学びでもあった。

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生 川田 政道さん

和歌、美術、秀歌を通じて伝承される生きた文化遺産

跡見学園創立 150 周年記念百人一首秋の公開講座では、学園の百人一首コレクションや美術作品を通じて、千年以上にわたり百人一首が日本文化に息づくことを実感した。講座では、和歌が人々の教養や美意識と結びつき、社会や文化の中で共有されてきたことが示された。

神野藤昭夫先生は、百人一首を文学史から文化史として読み解き、歌が伝承や文脈で意味を変えつつ現代に響くことを示された。21 番「いまこむと」の一夜説と月来（つきごろ）説を例に、古典解釈の多様性を知る貴重な機会となった。

矢島新先生は、硯箱や蒔絵、浮世絵などを通じ、和歌と美術表現の融合を解説された。14 番「みちのくの」を踏まえ、「忍蒔絵硯箱」では忍草の紋様に「たれゆゑに」の文字をひそめる教養の美を示し、文化の深みを体感した。

岩田久美加先生は、小倉百人一首の成立背景と百人秀歌の意義を示し、13 番「つくばねの」では筑波山を君の庇護の地から恋心の地とした逆転的な秀歌を紹介。筑波や富士の景物から、百人一首が時空を越えた対話の場であることを再認識した。

講座に触発され、『つくばねの』の落語的解釈や柿本人麻呂（火止まる、人産まる）、伊吹山の歌枕なども自主学习で調べ、百人一首の奥深さを体感した。三回の秋期講座を通じ、百人一首は単なる古典歌集で

はなく、教養、秀歌、美術作品が響き合い、現代そして未来の心に光を届ける生きた文化遺産であることを改めて確認できた。

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生
瀧上 浩司さん

文化遺産としての百人一首

昔熱心な指導をする国語教師が『増補三訂 中学国語学習必携 明治図書』（絶版か）

万葉集 P26 山部赤人

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（反歌）

のような副教材を用いていましたが、本来の原歌に対して改作がどのようなものか、関心を抱いての参加となりました。

第1回「跡見の百人一首コレクションとその魅力」では在原業平の「ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれないに水くくるとは」の解釈で現代の通説の「水くくる（括る）」（紅葉の間から水底が見える。）と、定家の解釈の「水くぐる（潜る）」（水面を覆う紅葉の下を、水が流れている。）を比較していましたが、考えてみれば『源氏物語』も青表紙本（意味の通らない本文も可能な限りそのまま残す）と河内本（意味の通りにくい本文に積極的に手を加えて意味が通るようにする）のような写本で読まれており、原本は現存しないのです。

つまり、平安末期から幕末までの注釈書を正確に読み解き、現代語訳を付しているのです。とはいっても、古典文化を後世に伝え広めた藤原定家の功績は大きいのです。

第3回「和歌史のエポックメイキングとしての『小倉百人一首』歌」では山部赤人の「田子の浦にうち出てみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」の解釈で降雪説（雪が降っている）と積雪説（雪が降り積もっている）を比較して、万葉集の長歌・短歌から分析

を行っていましたが、どちらが正しいかではなく、恋心が深くなると言う平安時代の書き手の感性が伝わって来る解説が第1回同様合点が行きました。また、私は市川市の「弘法寺手児奈霊神堂」を訪問しており、「我も見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つきところ」と赤人が下総で詠んだ歌を見て、江戸時代の神代学者・山口志道が発表した説も気になっています。

つまり、改変が施されたことにより混乱が生じているのです。

以上、改作の問題を考察しましたが、年代が古過ぎて記録が乏しい在原業平や山部赤人を知る手がかりとして一定の評価が出来ます。百人一首かるたとして奈良時代の人物が後世に語り継がれたので、良かったと思うべきです。

春期教養コース「『小倉百人一首』の歌の世界」

春期教養コース（文京）受講生

秋期教養コース「文化遺産としての百人一首」

秋期教養コース（新座）受講生
川田 政道さん

千年を結ぶ歌の心——跡見学園 150 年と百人一首の世界

和歌を通じて、時代と心を結ぶ一。

跡見学園創立 150 周年記念公開講座「知られざる百人一首の世界」は、春秋全 6 回を通じ、学園の百人一首コレクションに触れながら、「百人一首といえば跡見」と言われる所以を実感する貴重な学びの場となった。

春はことばの深みを探り、秋はかたちの表現を味わう構成で展開された。

春期講座では、佐佐木頼綱先生が四代にわたる跡見学園との縁を背景に、和歌を通じた教養の形成を示された。神野藤昭夫先生は 35 番「ひとはいさ」を例に、文学史の文脈で歌が多様な意味を持つことを解説。石井正己先生は 53 番「なげきつつ」の女性歌

人の声を取り上げ、文学と恋や四季との結びつきを鮮やかに描いた。

秋期講座では、神野藤先生が学園に伝わる百人一首コレクションを手がかりに 21 番「いまこむと」の解釈を紹介し、「現今百人一首」に跡見花蹊先生の句が撰ばれている点にも触れた。矢島新先生は 14 番「みちのくの」や伊勢物語を踏まえ、硯箱などの意匠を通して和歌と美術表現の融合を語られた。岩田久美加先生は 13 番「つくばねの」の逆転的解釈を通じ、歌枕に息づく文化の記憶を鮮やかに示された。

春秋 6 回の講座を通じ、百人一首は歌と心が響き合う永遠の文化遺産であり、千年を経て現代そして未来にこころの灯を届ける存在であることを実感した。ことばと美の往還の中で、教養が人を磨き、文化が未来を照らす力が息づいていた。参加者は、歌を通じて自らの心の奥に潜む“和の感性”を再発見する瞬間を体験し、跡見ならではのこの講座の深い価値を心に刻んだ。

■ 資 料

公開講座ダイジェスト 2025
跡見学園女子大学公開講座の記録

令和 8 年 3 月発行

発 行 跡見学園女子大学

〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2

電話 03(3941)7420

FAX 03(3941)8333

E-mail d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp

URL <http://www.atomi.ac.jp/univ/>
